

論文審査の結果の要旨および担当者

| | | |
|------|-------|---|
| 報告番号 | ※ 甲 第 | 号 |
|------|-------|---|

氏 名 梅津 綾子

論 文 題 目

出生と養育に基づく複数の・多元的親子関係ーナイジェリア
北部・ハウサ社会における「里親養育」の民族誌から

論文審査担当者

| | | |
|----|----------|--------|
| 主査 | 名古屋大学准教授 | 佐々木 重洋 |
| 委員 | 名古屋大学教授 | 阿部 泰郎 |
| 委員 | 名古屋大学教授 | 周藤 芳幸 |
| 委員 | 名古屋大学准教授 | 東 賢太郎 |
| 委員 | 中部大学教授 | 和崎 春日 |

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、ナイジェリア北部に居住するハウサの人びとのあいだでみられる子どもの引き取り慣行「リコ (*ri'ko*)」に焦点を当てた民族誌的記述をおこなうとともに、養育に基づく社会的親子関係と生殖、出生に基づく生物学上の親子関係との相関と異同を分析し、子どもが複数の「本当の親」をもちつつ多元的な親子関係を生きる事例の報告から、人間にとって親子関係とは何かという問題を再検討したものである。

序章では、これまでの西アフリカの里親養育を主題化した研究と、アフリカ以外の諸地域も対象に含めた人類学における家族、親族研究、出自理論、近年の構築主義的視点に基づく議論が批判的に再検討され、本論文の目的と構成が示される。

第2章では、ハウサ人と、調査地であるナイジェリア北部のザリア地域および、今回の主たる滞在調査地となったボーモー村の概要が述べられるとともに、同地域の子どもたち取り巻く成育環境、具体的には生業、家族・親族関係と家庭生活、公教育、公衆衛生などに関する現状がそれぞれ要領よく紹介される。

第3章では、ハウサ社会を含めて西アフリカでは子の引き取り慣行が一般的にみられることを確認したのち、本論文が主題として取り上げる「リコ」慣行が詳述される。ハウサ語の語義、同慣行に関するハウサ人による定義と解釈、実際に観察された事例が報告され、「リコ」が多様なあり方で実践されていることが明らかにされる。

第4章では、子育て期間における子どもと育ての親、生みの親との相関関係を経時的に調査した結果が示される。子どもの引き取り後は、原則として育ての親が子どもの養育に対して責任を負い、子育てに注力する一方、生みの親が子育てから完全に排除されるわけでもなく、時と場合に応じて育ての親を支援することが明らかにされる。

第5章では、子育て期間終了後の親子間関係について報告される。育ての親の養育によって成人し、さらに結婚して自分の家庭をもった子どもは、育ての親と生みの親のどちらとも親交を深め続ける事例が多く観察され、子どもは現行の法律上は生みの親に所属し、遺産相続なども認められているが、実際には、子どもの帰属意識や財産相続の面でも育ての親は生みの親と同等の役割を果たしていることが明らかにされる。

第6章では、これまでの民族誌的記述内容をふまえた総合的な考察がおこなわれ、4つの論点に沿って議論が展開される。そして、子どもにとって生みの親は出生、出自に基づく公的な権利ゆえに、育ての親は長年にわたる庇護・養育と共住の功績ゆえに、優劣や順位の次元を超えたそれぞれに重要な親であり、このような社会では「本当の親」を想定することが無意味であること、「リコ」の事例は、複数の親とともに多元的に展開される親子関係のあり方を具体的に提示していることが示される。

終章では、これまでの議論を総括するとともに結論が提示される。そのうえで、血縁に基づく親子関係を特別視する思考と、単一の親子関係を前提とするような思考を相対化する必要性があることが指摘される。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

西アフリカ地域の事例を対象とした里親養育研究は当初、1940年代前後以降、とくに人間の社会関係の再生産という観点から注目され、英国社会人類学を中心に出自理論に関心を寄せた数多くの研究がおこなわれた。その後、1990年代以降には構築主義の議論の隆盛とともに出自や血縁関係を相対化する議論が盛んになり、さらに近年では親子関係の構築性のみならず、その複数性にも注目する研究があらわれつつある。ただし、それらの事例はヨーロッパやオセアニア地域を対象としたものが多く、依然として血縁と生みの親の重要性を前提視した論調に傾きがちであることも否めない。

西アフリカの里親養育慣行は親子関係の複数性を論じるうえで鍵となる事例のひとつであり、例えばエスター・グディによる研究[Goody 1982]は、その点にも配慮した当時としては先駆的なものであったが、その分析はまだ機能主義的色合いが強く、また血縁による出自と単一の親子関係の絶対性を相対化するまでには至っていなかった。本論文は、このような西アフリカの里親養育研究の蓄積と、人類学における近年の家族・親族研究の動向をふまえつつ、長期にわたる参与観察と聞き取り調査によって、複数の親子関係が併存しつつ、子どもが複数の親とのあいだで多元的に構築した関係を生きていることを実証的に論じることに成功している。これは、西アフリカ地域の里親養育研究のみならず、他地域の事例を含めた通文化的な家族・親族研究における最新の議論にも一石を投げ得るものであり、高く評価される。

また、本論文は現代ハウサの「リコ」慣行に関する民族誌的報告という点で資料的価値も高い。ハウサの「リコ」に関しては、これまでの先行研究においても部分的に言及されることはあったが、本論文のように詳細に、しかも「リコ」関係を子育て期から、子どもが成人、結婚するまで追跡した事例報告は存在しない。資料は内容豊かであり、子どもの成育環境に対する幅広い目配りもなされている。同地域近辺では今、武装集団ボコ・ハラムが活動しており、当面は本論文のような調査研究をおこなうことが困難であることを考慮するなら、その価値は今後いっそう高まる可能性がある。

ただし、本論文にも問題点がまったくないわけではない。本論文の記述と分析は明快であり、論点もよく整理されているが、それゆえに、親子関係や複数の親どうしのあいだでみられる葛藤や、「リコ」がうまくいかずに、子どもが育ての親を変更したり逃亡したりするような側面についての論述は乏しく、やや理想論的な論調に終始してはいないかという指摘はあり得る。また、人間にとってそもそも親子とは何か、という大きな問題に対する根本的な問い直しも、今後の課題として残されている。とはいえ、これらは本論文の完成度が高いがゆえに、筆者に対するさらなる期待から生じるものでもあり、本論文の価値をいささかも損なうものではない。

以上により、審査委員一同は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。